○正しい知識が必要だ

マナウスは赤道直下で、典型的な熱帯雨林気候だ。原因不明の高熱が続くことが、よくあった。病気になっても日本の薬はなかなか効かず現地の薬は強すぎるので、健康管理にはずいぶん気を使わなければならなかった。

そのような中、最初は風邪のような症状だが、それが続いている間にだんだんと体がぐったりとして動けなくなってしまうというA型肝炎が、時々発生した。

すぐに病院に行けばよいが、通訳が必要なため、自分たちだけで行くことは難しかった。

感染原因等がはっきりわからなかったので、生野菜を避け、すべての食材に火を通し、食器には熱湯をかけて消毒するというようなことぐらいしかできなかった。

なかなか治らない状態が続くと、ついには洗濯物すべてを熱湯消毒するようになってしまうこともあった。しかし、すべてを熱湯消毒することは、とうてい無理なことだった。

ある家庭では小学生の娘さんがA型肝炎に罹り、次の年には奥様が罹られた。肝炎は安静が必要であり、他人への感染の恐れもあるということで、家族はもとより学校職員＆家族はずいぶん心配した。

とくに日本食の入手がむずかしい所で、奥様が動けない状態では、家庭の食生活の機能がマヒしてしまう。さらに病人は脂っこい食事がだめだったので、食材を調達する苦労はたいへんなものだった。

うちのマラリアのときのように、日本人学校職員で食事のお世話をすることになった。朝食と病人食はその家庭でなんとかしていただき、先生と２人の子どもさんの弁当と夕食を輪番制で差し入れた。

２カ月ほどこの状態が続いたが、病状が思わしくないため、とうとう奥様はノイローゼ状態になり、治療のため一人で３カ月ほど帰国された。残念なことだったが、海外での非常事態の場合は、みんなが家族という気持ちで協力しなければならないということを痛感した。

うちでも、A型肝炎に息子が罹った。ひとときもじっとしていない息子が、全く動かなくなってしまった。シャワーも、椅子に座って浴びるのがやっとという状態だった。

このため、食器や衣類等の熱湯消毒等の対応をとったが、限界があり継続することはとても無理だった。

病院で医師に尋ねたところ、「A型肝炎は経口感染するが、体力があれば発症しない。きちんと治療すれば治る。菌は病気の初期から排出されるので、症状が出てから消毒しても意味がなく遅すぎる。」と、初めて詳しい情報がわかった。

息子が短期間で完治し、医師から許可が出たのでさっそく登校させたところ、「なんでこんなに早く学校に出すんだ。自分の子どもにうつってしまう。」と非難の声が陰で飛び交ったそうだ。私が教員だったために直接言われることはなく、他の職員からうわさを聞いてわかった。病気の正確な情報がきちんと認識されていなかったため、憶測と不安だけが先行してしまったようだ。

しかし、正しい情報がきちんと認識されていたとしても不安感情までを払拭してしまうことができたかどうかはわからない。病気も怖かったが、それまでの人間関係が簡単に崩れてしまうかもしれないという不安が、それ以上に怖かった。

○トイレはどこだ？

日本でも『便所』、『トイレ』、『お手洗い』等といろいろな表現があるので、ブラジルではどう尋ねたらよいか不安だった。単語は正しくても発音がまずいと伝わらないことがあるので、よけいに不安だった。そして、教えてもらったのが、「Onde fica o toilette?（トイレはどこですか？）」だった。他に『Banheiro』や『Sanitario』という呼称もあった。

○トイレの男女の区別は？

トイレにやっとたどり着いたとしても、男女の区別を示すマークや色の区別はなく、文字表現だけだった。

「男性用は、どっちかな？」と、入り口でずいぶん迷ったこともあった。『M』と『W』なら、『Man：男性』と『Woman：女性』と判断できたが、『M』と『F』の時は何を意味しているのかわからず、間違って入ってしまって赤面したことがあった。これは、『Masculino：男性』と『Feminino：女性』だった。

だからといって、男性が『Masculino』だから頭文字は『M』、女性が『Feminino』だから頭文字は『F』と覚えていると危うく間違えてしまうのが、『H」と『M』の組み合わせのタイプのトイレだ。文字だけの表記で、誰も出入りがなくてこの２つのトイレの前に立ったら、さて…？

いつものとおり『M』が『Masuculino：男性』だから、『M』の方が男性と考えると大間違い。この『M』と『H』が対になっているタイプは、『M』が『Mulher：女性』で、『H」は『Homen：男性』となっていた。

『M』だから、男性と思って扉を開けると「おぉ～っと、ごめんなさい。」ということになりかねない。

『M』と『F』、『H』と『M』の組み合わせの他、色の違いもなく文字だけ書いてある『Cavalheiro』と『Dama』のトイレもある。この２つの単語は、『Cavalheiro』が紳士で、『Dama』が婦人だそうだ。

また、男性用便器は日本のステンレス流し台のような共同だったり、個別でも背伸びしなければならない高さだったりしたこともあり、私の足の長さでは、とても苦労した。

新しい場所に行ったら、トイレは早めに確認しておいた方がいい。公衆トイレがどこにでもあるとは限らなし、有料の場合もある。

はよ探せ トイレは急に 見つからん

まあ、日本でも「男／女」「男性／女性」「紳士／御婦人」「殿方／御婦人」等の表記があるので、漢字の読めない外国の方は戸惑ってしまうかもしれない。

ところで、日本で、外国人から「トイレはどこ？」と尋ねられたら、うまく案内できるだろうか？

日本の駅のトイレの英語案内表示は、『LAVATORY』となっていた。もし、「Where is lavatory?」と外国人から突然尋ねられても、どういう意味なのかすぐに理解できないんじゃないかと不安だ。

「国際人への入り口は、トイレから」と言っても過言ではない。しかし、なかなか国際人になれない私だ。

○ゴミ箱の失敗

ロサンゼルス空港では、ゴミ箱で失敗した。ゴミ箱だと思ったのが、紺色をした大きな金属の箱だった。投入口が狭くて、「なんだ、このゴミ箱は！」と思いながら押し込むようにして捨てた。

しばらくして、他人の行動を見ていたら、手紙を投入していた。ゴミ箱ではなく、郵便ポストだった。青ざめてしまったが、ゴミの取り返しはできなかった。ごめんなさい。

○サンパウロ税関での出来事

気候や治安などの環境により心身共に不健康に陥りやすい地域にある在外教育施設には、『不健康地』という修飾語が付けられていた。アマゾン川中流にあるマナウスは不健康地だったが、同じ赤道直下にあるアマゾン川河口のベレーンは違った。マナウスはジャングルとアマゾン川に囲まれた陸の孤島だったが、ベレーンは大西洋に面しており他の都市と陸路でつながっていた。

『不健康地』にある日本人学校の職員には、任期途中の一時帰国が認められていた。赴任時はリオ・デ・ジャネイロ空港で総領事館の立ち会いでスムーズに入国できたが、

一時帰国の際はサンパウロ空港、しかも自分たちだけでの税関検査が待ち受けていた。同僚家族のうち１家族は検査なし、もう１家族はトランクをちょっと開けただけだった。

問題は、我が家に発生した。トランク２個、リュック２個、バッグ１個、段ボール箱４個の荷物だった。経費節約のため段ボール箱を壊れないように二重にしてガムテープを貼り、ロープを掛けていた。これに目を付けられたのか、トランクに続いて開けるよう求められた。

「なぜ、自分たちだけが…」と思ったが、表情に出れば相手も感情的になってしまうかもしれないと平静を装い、「今夜はサンパウロ泊だから、何時間かかってもいい。」と開き直って、求めに応じて段ボール箱を検査台の上に乗せ、開けた。日本食の食料品が出てくると、質問がきた。

「おまえは、マナウスにレストランを持っているのか？」

「違う。私は日本人学校の教師で、あと１年半マナウスに住む。そのための食料だ。」

「じゃあ、これらの品物はいくらだ？」

「これは私の母がプレゼントしてくれたので、金はかかっていない。」

頼る人は誰もおらず、側で妻子が不安そうに見ている。自分ががんばらなければならない、絶対に税金を掛けられたくない、という強い思いを持って、片言のポルトガル語でこのようなやりとりを２時間も続け、なんとか課税を免れることができた。

税関員とやりとりしながら、「言葉がよくわからないというのも強みになる。都合が悪いときはわからないふりができる。（ほんとうは、ほとんど想像で聞いていたので、あまり偉そうなことは言えなかったのだが）」と変な自信をつけた。

実は、平静を装った強気の対応の裏には大きな不安を抱えていたのだ。日本に帰る前に、マナウスの写真屋マルチノ氏（写真注文でとても親しくなった）から、日本製一眼レフカメラの中古品機材を US$5000 相当、日本で買ってくるように頼まれていたのだ。

検査台の上にトランクや段ボール箱を乗せ、カメラのバッグは足下に置いて足で押しやり、冷や冷やしながら進んで行ったのだ。（隠したのではなく、求められなかったから見せなかったのだ）

税関を出たら、同僚家族が心配そうに待っていてくれた。長時間も待っていてくれてうれしかった反面、先輩の言葉にがっかりした。

「税関の前に信号があって、青は検査無、赤は検査有だろ。あれはね、怪しそうな人は、赤信号になるらしいよ。」

「えっ、偶然じゃないの？」

「すぐ開けることができるトランクと、厳重に梱包した段ボール箱じゃ、どっちが怪しい？」

「簡単に開けにくい段ボール箱かな？」

「そうだろ。成人男性と母子ではどっちが怪しい？」

「子どもがいれば、怪しくないかも。」

「だろ。だから、うちの荷物はトランクだけだし、荷物はすべて妻と子に任せ、俺は手ぶらだったんだ。」

「そうかあ。うちは、段ボール箱があったし、夫がしっかりしなきゃと私が荷物を全部持って、妻子は後からついてきていた。それを早く知っていたら、こんなに苦しまなくてよかったかもしれない。」と悔やんでも後の祭りだった。

『トラブルがなきゃ、トラベルじゃない』と言うので、強烈に思い出に刻み込まれた経験だった。でも、この話を鵜呑みにしないでほしい。私は、責任は負えないので。

○恥ずべきはどっち？

ブラジルの私立小学校を訪問した際、「日本の学校では、子どもたちが掃除している」と紹介したら、校長先生から「自分の学校でもぜひ取り入れたいが、そうすれば明日の新聞に載るだろう」という言葉が返ってきた。

教室にはゴミがたくさん落ちていた。学校の前にはお菓子屋さんが店開きしており、子どもたちはすぐお菓子を買える状況にあった。街でも学校でも、あちこちにゴミが捨てられていた。道路には飲料水の王冠が車に踏まれて、アスファルトにたくさんめり込んでいた。

ブラジルでは、「ゴミを捨ててはいけない」、「掃除をしなければならない」という教育は行われていないし、そのような意識も強くなかった。仕事として掃除をする役割の人が、きれいに片づけていることが多かった。

２月に行われる Carnaval（カーナヴァル：リオ・デ・ジャネイロが有名だが、ブラジルの各地で行われている）では、各グループが１年間かけて準備・練習し、趣向を凝らした山車、衣装、サンバの歌やダンス等を競う。

同僚はリオまで行ったが、私は許可が下りず（誘惑に負けぬ強い心がない？）、マナウスで見に行った。

きらびやかなカーナヴァルの衣装や山車

山車の上で踊る人、山車を動かす人

桟敷席の下はゴミだらけ

カーナヴァルは夜 10 時頃からだが、盛り上がるのは 12 時過ぎてからだったので、私一人で行った。実際に見ると、テレビや写真では見ることができない光景を目にした。

踊りの時、一つのグループの山車が Confete（コンフェ

ッチ：紙吹雪）を華やかに振りまきながら行進していくと、その後は散乱状態だった。そのため、山車の後から掃除をする人が、次のグループのためにきれいに掃除していたのだ。見事な役割分担だった。

山車を押す人、掃除をする人

きれいに掃除され、次の準備ができた

ちなみに Confete（コンフェッチ：紙吹雪）のような菓子を Confeito（コンフェイトウ：球状で周囲に小さな突起がある豆粒大の砂糖菓子）と呼び、これが日本に入ってきた時、その発音に似せて『金平糖（こんぺいとう）』と名付けられたそうだ。

日本ではゴミを捨てないように指導され、法律による規制もある。しかし、それにもかかわらず無秩序に不法投棄されているような場面がたくさんある。知識や経験がなくてしないのと知識や経験があるのにしないのとでは、大きな違いがある。悲しくなった。